乳幼児の相互作用に関する研究

巷野悟郎（東京家政大学児童学科）
鈴木裕子，後藤嘉余子，川合貞子，
金平文二（東京家政大学児童学科）
佐々木聡子，小野明美，井桁容子，
宮城初江（東京家政大学乳幼児研究施設）

Ⅰ　はじめに

子ども集団は大人からの保護・干渉・指示・禁止などといった枠から開放されると，子ども自身で試行錯誤しながら様々な活動や経験を通じて，自らの行動の選択を行い問題解決力を養う。そこで我々は乳児期や幼児期前半の子ども集団における相互作用について観察し，乳幼児期の相互作用がどのような契機で成立し，いかなる様相を呈するのか，更に保育体験の差異が子どもの相互作用に影響を及ぼすか否かという点についても検討をすすめることとした。

Ⅱ　対象および方法

今年度はパイロットスタディとして，東京家政大学乳幼児研究施設（0歳児から3歳児の保育施設）に在室中の乳幼児を対象とし，日常の保育室（見慣れた空間）や別の遊戯室（見慣れない空間）での行動観察・VTRの録画等によって集団保育の場における子ども間の相互作用の展開について観察し，併せて保育者の保育記録を中心に考察をすすめた。更に対象群（家庭児）との比較を行い，相互作用の生活経験の差異についても考察を試みた。

Ⅲ　結果及び考察

乳児や年少幼児の行動をみると，年齢が低いほど子ども間の相互作用は保育者を介しての成立が多く，これらのことは乳児保育室の観察からも明らかであった。

乳児室には歩行の確立する1歳前後までの乳児が保育されていて，高月齢の乳児がベット越しに月齢の低い乳児に「バーバー」と呼びかけたり，遊具を渡したりといった交流がみられる。しかし乳児同志の場合，一方的に自分で行動するだけであって，相手の反応を期待するまでには至っていない。そして保育者を仲介として，「○○ちゃんにあげてきてね」といった指示に促された行動は可能であるが，その際も保育者→A児→B児といった一連の行動で終結してしまい，多くの場合は保育者とA児との循環で満足していることが多く，自発的な他児との相互作用は極めて少ない。

しかし，1歳児から3歳児までの幼児の生活空間とされている幼児室では，個々の子どもの主張や個性がはっきりと出てくるようになり，目的のある行動が見られるようになる。1歳児では物を取り合い，どちらかが泣くまでお互いの主張をくり返し，片方が泣くことによって終結するといった経過をとることや，保育者の膝を奪い合う，他児に遊びを邪魔された結果，自己防衛のためにかみつくなどが見られる。また自分より小さい子どもに力づくで要求を通したり，他児のけんかにつられて参画してしまうといった行動から，友達と手をつないで歩く，他児が泣いているとティッシュペーパーを持ってきて拭くなど，徐々に仲間の存在を認めた友好的な行動が現れる。さらに3歳児になると，ごっこ遊びを中心に幼児間の相互作用が豊かにもたれるようになり，同時に年長であることの自覚も芽ばえ，ケンカの仲裁に入ることや，○○マンといったヒーローになりきり，お互いに役割をもって室内を縦横に動き回る姿がみられるようになる。

即ちこの段階では保育者子どもといった相互作用と合わせて，子ども子どもの相互作用が成立していると考えられる。その契機としては遊

具や言葉かけであるが，その後は次第にそれぞれのイメージの結合と発展によって十分に活動の展開が期待できるようである。

さらに異年齢間の交流もみられ，乳児室の乳児の様子を幼児が見にきたり，遊具を持ってきたりする様子や，逆に歩行を開始したばかりの乳児が幼児室に入り，幼児の後をハイハイで懸命について回るといった様子も見られる。このような体験の蓄積と自由に行動できる身体的・物理的な条件が整うことと相まって，次の段階においては友好的な相互作用を自ら積極的に実践するようになるといえよう。

次に乳児期よりの環境の違いが，幼児の相互作用の成立過程にどのように影響を及ぼすかを，家庭で保育されていた児との比較でとらえてみた。年齢はいずれも2歳6カ月から3歳6カ月の幼児である。その結果始めての遊戯室のなかでの相互の行動についてみると，集団保育の経験のある児は，入室直後は保育者の存在を気にするものの，しばらくすると遊具を自在に用いて活動を始め，空間を有効に利用した開放的な行動がみられる。そして更に時間の経過に伴って自分達のペースで活動を展開し，幼児間の相互作用も頻繁にはかられてきて，空間利用も分散型から一定の空間の活用がみられ，活動の盛り上がりが認められる。他方家庭保育児の場合は，集団保育児に比べて入室初期の緊張感が強く，母子一体の動きが主となっている。しかし緊張感が徐々にほぐれる頃からは行動範囲も拡がりをみせ，他児の存在を気にするようになり，遊具を奪い合う等の行動形態をとりながらも相互作用の契機を求めていくようになる。更に他児と同様の行動をとろうとするようになり，相互作用も見られるようになる。

行動の軌跡は初期には非連続的・直線的であり，活動の場も特定空間のみの利用であったが，徐々に活動も大きく豊かになり，一連のまとまりが見られるようになる。同時に幼児間の相互作用も始まり，遊具を奪いあったり，他児との衝突もみられるようになる。

以上のように両者間の比較をみると，適応の速度や活動の連続性・持続時間，また相互作用の量的・質的な豊かさは集団保育児の方が勝っているようである。これらは乳児期より1対多数という関わりの中で成長してきた場合と，1対1の関係できた成長史の違い，また子ども集団に加わっていたかどうかにその一因があるとも考えられる。相互作用の生起については，量的な違いが認められたが，過程自体は同様の傾向を呈するようである。このような結果から，行動軌跡の分析・利用・空間の意味・相互作用の経過などを詳細に分析する方法についての示唆が得られた。

Ⅳ　おわりに

保育室での乳幼児の観察や行動記録，年齢的な特徴とその推移，また特定の場における同年齢児の行動の比較などを通じて，相互作用の始まる過程，展開について概観してきた。その結果幼児間の相互作用は，保育者との関係から徐々に幼児間へと推移していくことや，生活経験の違いによってその様相を異にすることが見られた。また展開については，時間的な差異はあっても同様の経過を辿ることが予測された。更に行動の範囲，軌跡の違いについては，今後個々の子どもの特性にも考慮しながら分析的に検討をすすめていく予定である。併せて幼児間の相互作用が円滑にもたらされるためには，保育者・遊具等の条件がどう関与することが有意義であるかという点についても検討していきたい。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1 はじめに

子ども集団は大人からの保護・干渉・指示・禁止などといった枠から開放されると,子ども自身で試行錯誤しながら様々な活動や経験を通じて,自らの行動の選択を行い問題解決力を養う。そこで我々は乳児期や幼児期前半の子ども集団における相互作用について観察し,乳幼児期の相互作用がどのような契機で成立し,いかなる様相を呈するのか,更に保育体験の差異が子どもの相互作用に影響を及ぼすか否かという点についても検討をすすめることとした。